立教大学学術推進特別重点資金（立教ＳＦＲ）
大学院生研究
２０１０年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院　21 世紀社会デザイン研究科　比較組織ネットワーク学専攻		
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏　名	
	21 世紀社会デザイン研究科 比較組織ネットワーク学 博士後期課程 2 年	嘉瀬井　恵子　印	
指導教員	所属･職名	氏　名	
	21 世紀社会デザイン研究科・教授	萩原　なつ子　印	
自然・人文・社会の別	自然　・　人文　・　社会	**個人・共同の別**	個人　・　共同　1 名
研究課題名	「合議民主主義を問い直す」千葉県・三番瀬の自然再生を事例として		
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏　名	
研究期間	2010 年度		
研究経費	200 千円		

研究の概要（200～300 字で記入、図･グラフ等は使用しないこと。）

日本ではじめて自然再生について合意を目指した千葉県の三番瀬円卓会議（以下;円卓会議と記す）を事例に、合意形成の現状と課題について研究を進める。本研究は①円卓会議手法の比較分析と②三番瀬の事例研究で構成し、①では、国政レベル及び地方行政レベルで設置された円卓会議の比較と、円卓会議設置年代別の手法の比較を行い、その共通構造と問題点を抽出する。合意形成にあたっての特徴や様々な批判に対し、合議のあり方を問い直していく。②では、県の三番瀬埋立て政策の歴史を概観した上で、自然再生における合意の含意を検証する。特徴としてはピエール・ブルデューのハビトゥス、戦略、界の概念に即して考察する。

キーワード（研究内容をよく表しているものを３項目以内で記入。）

〔合意形成　　〕〔ピエール・ブルデュー　　〕〔円卓会議　　〕

研究成果の概要（図･グラフ等は使用しないこと。）

（様式１）で述べたように、本研究の目的は、合意形成の現状と課題を明らかにすることである。2010 年度は、前年度の研究成果（様式１の①）をふまえ、円卓会議に参加をした委員を対象にして行ったインタビューから、ブルデュー社会学に即して合意形成プロセスの解明を試みた。当該、研究助成期間内において理論研究と事例研究を並行して行った。対象としたのは、以下の 2 点である。

１）　ブルデュー社会学を用いた円卓会議の理論的な検討
２）　インタビュー調査の分析（ブルデュー諸概念との接合）

１）ブルデュー社会学を用いた円卓会議の理論的な検討

円卓会議における三番瀬の自然再生議論を考察する上で、個人が環境思想をどのように獲得し、どのように行為へと移行していくのかをブルデューの①「ハビトゥス」、②「戦略」、③「界」の概念について、その内包と外延を見定めた上で分析を行った。

① 「ハビトゥス」と自然再生

ハビトゥスとは、人間の特性としてあらかじめ備わっているのではなく、その都度創造され、修正を加えながらも同一性を失わずに持続していく再帰性概念である。多くの選択肢の中からその場に応じて選んだ行動が連続性をもち、身体化されるのである。ブルデューはこの概念により、明確に意識しない行為の中で、人びとは自分の行為を実はコントロールして、自分の行為をできるだけ判断しているということを社会学は考慮にいれなくてはいけない、ということを論じていると言えよう。従ってハビトゥスは、会議で自分の意見を主張するような、なにがしかを表現する場に我が身が置いた場合、あらゆる表現を自ずと承認する傾向を持つのである。

個人が三番瀬の自然観として保持している理念や信念や態度は、意識せずとも「三番瀬のハビトゥス」から生み出されているのである。たとえば円卓会議での議論において、科学的に構築された客観的事実と自身の主観的な願望との間でも、委員は予め適応した心的傾向のハビトゥスにしたがった発話をし、考えられない事案を排除するのである。

② 会議における「戦略」

ブルデューの定義する戦略とは、「ハビトゥスの出現であり、行為者が自分の本性のままに歴史が行為者をつくったとおりのままにふるまうと、自らが直面した歴史世界にあわせて自然に調整されたかのように、必要なことをし、潜在的に刻み込まれた将来を実現すること」（山本哲士「増補版ピエール・ブルデューの世界」三交社 2007）である。

三番瀬の自然再生を議論するにあたり、「自然を再生したい」という純然たるものの中にも戦略が存在し、その戦略の中には、様々な社会的背景や文化の違いから、「これだけは実現したい」という利害関心が存在する。円卓会議でも各委員は戦略を駆使して議論をおこなっていた。たとえば漁業関係委員は経験知をもとに発話をしたが、結局は不本意ながらも議論で要請された事案を飲むことがその場を乗り切る術だという戦略をとっていた。しかし実際は戦略を取らざるをえなかったのであり、彼らにとって妥協こそが戦略であると結論づけたのである。

したがって会議には、２つの戦略が存在していた。まず１点目は、会議の主たる目的である自然の「再生戦略」である。そして 2 点目が、最終的に「再生戦略」に向かうために会議でとらざるを得なかった「合議戦略」である。

③ 会議と「界」

ブルデューは、界の概念を「なにがしかの掛け金をかけようとするゲーム空間」のことを指すとしている（ピエール・ブルデュー「社会学の社会学」藤原書店 1991）。多様な三番瀬の価値観を含んだ円卓会議を、１つの界と捉えることにより、界への参加に対して参加者がどのような期待を抱いたか、その後どのようにハビトゥスが展開していくのかを考察することが出来る。

しかし三番瀬の会議では、この「円卓会議界」という１つの界の他にも、「円卓会議界」

研究成果の概要　つづき

の中に、参加主体枠ごとの界が存在する。つまり会議は「専門家委員界」「漁業関係者委員界」といった様々な「利害関係界」の集合であるといえる。この「円卓会議界」に参加した委員は、社会的・文化的出自を異にした「利害関係界」の個人または団体の代表者である。この界の中で行為者は正当性の獲得を行う。円卓会議ではこのように違う界に属する委員が、どのように主観的世界を統合し、構築するかについての展開がなされていった。

2）インタビュー調査の分析（ブルデュー諸概念との接合）

本研究では、円卓会議に参加した委員を対象にインタビュー調査を行った。この会議では専門家委員、環境団体委員、漁業関係委員、地元住民委員、公募委員、産業界委員といった様々な主体が参画をしており、本年度は主要な委員にインタビュー調査を行い、ブルデュー諸概念との接合の検討を加えた。つまり、インタビューから、自然再生についての「ハビトゥス」を導き出し、会議という「界」への参加志向と、合意するための「戦略」について検討を行った。

①変容するハビトゥス

会議の経過とともに一人の人間に複数のハビトゥスの変容が確認できた。つまり会議の中に客観化されている、三番瀬の意味感覚の再活性化をハビトゥスの変容から読み取れるということである。

考察にあたり、自らの出自と三番瀬政策のさまざまな流れの中で第一義的に存在する性向を第 1 次ハビトゥス、円卓会議で確認できる性向を第 2 次ハビトゥス、円卓会議の解散後、県が自然再生事業を策定する段階を第 3 次ハビトゥスとし、その変容を分析した。

たとえば公募委員へのインタビューでは、委員として参加する以前の一市民として「三番瀬の自然は故郷を思い出す。関わっていきたい」という第 1 次ハビトゥスが存在した。そして「(円卓会議の委員として）いっちょ、やってやろうじゃないか」という自然再生への意気込みの第 2 次ハビトゥスが存在する。その後、「自然再生事業を策定するという段階では、再生にむけたグランドデザインが重要」という第 3 次ハビトゥスが存在した。このような第 1 次ハビトゥスから第 2 次、第 3 次へと変遷する過程からは、会議という場面で自身に要請されている責任や使命によってハビトゥスが塗り替えられ、生活知ベースから専門知ベースへと模索の跡を見せる様子がわかる。

一方、環境団体委員の場合、第 1 次ハビトゥスは公募委員と同様であった。しかし次第に「はじめは期待感があった」という三番瀬の再生に対するハビトゥスが、「回を重ねる度に、段々、いわゆる利権をいかにして守るかっていうね。それでね、海のこと、緊急なことは護岸を作ることだとか、で、そういう風になって来て、段々、熱がさめてきた」という「合議に冷めた」第 2 次ハビトゥスが存在する。その後、「三番瀬の現場に行って、手抜きがないか監視してやろう」と言った使命感の第 3 次ハビトゥスが存在しているのである。

そして専門家委員等他の委員へのインタビューでも、利害関係主体独自のハビトゥスの変容がみられた。

②解けない対立構図

①で示したように会議の経過とともに趣の異なる複数の別様な形で生成されたハビトゥスのぶつかり合いが、自然再生の合意を困難にさせていたことがわかる。その結果、円卓会議は議論を誘導するような強い委員が残り、弱い委員は辞任や欠席をしていった。

そもそも円卓会議では会議設置当初から、別々のハビトゥスを有する主体が集まることは想定されていたはずである。したがって、三番瀬のハビトゥスの相克という界の場作りの失敗であったのである。結局、平等性を重視したはずの円卓会議であったが、「界」には不平等が存在するなど、円卓会議は変質していったのである。

研究発表（研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。）

①雑誌論文（著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ）
②図書（著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数）
③シンポジウム・公開講演会等の開催（会名、開催日、開催場所）
④その他（学会発表、研究報告書の印刷等）

①嘉瀬井恵子「三番瀬再生計画検討会議における合意形成プロセスに関する一考察」
紀要『21世紀社会デザイン研究』第９号
2011年
ｐ21～ｐ30

④ 21世紀社会デザイン研究学会　自由論題セッション報告での発表
2010年12月5日＜跡見学園女子大学・文京キャンパス＞